**『啐啄』　　　　　　　　　7月号**

生徒たちは、今「思春期」を通過中です。

**校長　今井　弘樹**

「思春期とは、サナギのような時期である。サナギというのは硬い殻に包まれて死んだように動かず、外から見ると何が起こっているのかわからない。しかし、サナギの内部ではいもむしが蝶になるという大変な変化が渦巻いている。無事に蝶になり、飛び立つためには外側に硬い殻を築き、サナギの時代を過ごさねばならない。同様に人間にも、サナギの時期が必要である」

これは、有名な臨床心理学者の[河合隼雄](http://d.hatena.ne.jp/keyword/%B2%CF%B9%E7%C8%BB%CD%BA)氏の言葉です。思春期を昆虫のサナギにたとえ、あえて周囲と壁を作り、時に衝突する思春期特有の「反抗期」を人間の成長に不可欠な段階であると言っています。

個人差がありますが、この時期には、大なり小なり三つの変化が訪れます。

その変化の一つ目は二次性徴という身体の変化です。「何かこの頃、大人びてきたなー」ということです。

二つ目は心の変化です。自己意識が高まると同時に他者意識も高まってきます。「自分は人からどのように思われているだろう？」など、友だちの目で見る自分像です。

この「思春期の心の変化は」自分でも予期できないで、勝手に生徒たちの心を揺らし、それも突然大きくなったりするので、気持ちが急に不安定になったり戸惑ったりします。

”自分でもわからない得体の知れない心” とつき合わなくてはいけないので思春期の生徒たちは大変です。”

三つめは大人との関係です。生徒たちは、「もう大人？」「まだ”子供”？」の間を行ったり来たりしながら、大人との考えのすれ違いがあったり衝突して心が揺れて荒れたりします。

生徒が思春期に入ると、親は揺れている生徒に付き合うことになるので大変です。親としてはどうしていいかわからないような気持になるときがあります。お互いの間に気持がうまく通じず、”子供”がどこか他の世界に行ってしまったように感じるからです。思春期の親と子の付き合いは、心の葛藤の連続です。

けれども、≪生徒 (毛虫)≫が≪大人 (蝶)≫になる間に≪さなぎ≫の時期があり、内側の実にものすごい変化を成就させるためには、≪親の (堅い守り) ≫が絶対に必要なのです。

戸惑いや悩みは、思春期の”子供”のいる家庭では、大なり小なり起きています。忙しいでしょうが、少しだけでも生徒の普段の言動に耳を傾けてください。”子供”と話し合う時間をつくってください。そんなとき、親同士で悩みを出し合うと心が軽くなるし、解決の糸口も見つかるかもしれません。保護者会等の折に、保護者同士が親しくなってくださることも大切です。

そして、困り果てる前に学校にご相談ください。瀬田中学校は、今年度から心の専門家のスクールカウンセラー(3人)の常駐校です。教職員もスクールカウンセラーも、いつでも待っています。